

謹賀新年

胸に煙がナ〜ア、絶えやセ〜ヌヨー。(大島節一番)

新しい年を迎えられたことが、こんなに嬉しいとは。練馬区高齢者筋力向上トレーニング。その初日、9月19日。高血圧であることが判明した。『何時、何処でお倒れになっても、おかしくないヨ』と、田中吉祥寺病院内科医、長坂先生が、叱る。私も驚く。昨日(12/23)は、低血圧降下剤のレベルアップ。若先生に、年越しと年開けの菓をいただく。おお先生のご子息とか？『寒いことが一番危ないですよ』と。気をつけねば、なりません。

大豆の種子を蒔く。 シャーレに脱脂綿を敷いて水。種を置く。20℃。大豆が膨れる。ヘソから幼い根が覗く。ぐんぐん伸びてくる。豆が起き上がる。子葉が開く。加温棚を薄暗くしておく、ぐんぐん茎が伸びる。モヤシ……。暗室、頂に弱い光。モヤシができる。大豆モヤシができる。

畑では、モヤシは困る。光りが足りないのである。春は、彼岸過ぎ、ソメイヨシノの開花過ぎが、蒔き時。2〜3か月ほど、蒔ける。収穫期が広がる。やがて、エダマメとして頂けます。

幼根が土中に伸び出したら、覆いをのける。大豆を薄明るいところで育てると、頂芽が巻きだす。枝分かれしない。支柱に巻き付く。大豆としては、情けない。

大豆は、好日性の植物である。種子が水を吸い。双葉の養分が溶けて、胚に。幼根に頂芽に運ばれる。光りが射せば、緑色になっていく。暗ければ、モヤシ。畑では日光不足。やがて、双葉の間から本葉が立ち上がる。光合成の始まりだ。葉脇から脇芽が立ち昇る。花が着く。豆が成る。マメが膨らんだのを見て、「エダマメ」として食べる。

大豆の原産地は、中国北部・ベリヤ・日本に野生する野豆。 太古から食料にされ、満州〜シベリア、アムール川流域の古代の人々によって栽培が始まったようである。やがて中国に渡って五穀の一つとなった。日本では、縄文遺跡から出土しているが、栽培されていたかは定かではなく、野生豆を採集したものであるようだ。18世紀ころに中国から伝わって、本格的に栽培が広まった。…とある。(栽培植物の起源と伝播 二宮書店) 野豆は、蔓性。

イチゴ、キウイを戴(いただ)く⇒果実を食べる。 小さな種子をピンセットで外して、播種床のゴールドンピート板に蒔きました。やがて芽が出る。

例の、ペットボトル鉢を使って生徒たちが蒔く。播種の実習である。子供たちは甘い実をいただき喜ぶ。『先生、この実習、毎週あるといいな!』と喜ぶ。良い形質の苗は作れない。雌雄不詳の苗ができる。

椿、蓮、カンナ。 硬い果皮。 50番…80番の紙ヤスリで皮を削る。実の中の薄皮が覗く。 で、播種床に蒔く。 種子が吸水、膨らんで果皮が割れる。根が出る。 芽が出る。

椿の種を生徒たちが拾い、製油所に。 茹でて、蒸して、圧力を掛けて、絞り上げる。 椿油だ。 ツバキノ林は、落ち葉でフカフカ。 掘ってみると腐れた葉達の中に硬い果皮が取れて、ブヨフヨの種がある。 根が覗く。 2～3年は経かっているであろう。 大自然の循環だ。 大島にて。

蓮の場合。 掌ぐらいの大きな果托の穴から種がこぼれる。 沈む。 ヘドロに落ちる。 硬い果皮も腐蝕する。 根が伸び、芽が出られるようになる。「誠蓮」と言う小型の食用蓮根の種を蒔いてみました。 出ましたよ芽が。 果皮を削ってまけば、次の春で芽が出るヨ。 上野不忍の池。

食用カンナ 深大寺植物園の開園前。 今のバラ園の所に 200m。直線状にカンナの植え込みがあった。 10月でしたか、果苞の中に黒い種が覗いていました。 採種。 喜んでおりますと、公園係員が寄ってきまして、『園内の採取種は、禁止だよ。今回限りだ』。 苦い思い出だ。 種子をヤスリで削ることもおっくうになり、そのまま終わった。 深大寺公園。

食用カンナの苗が「サカタ種苗」「タキイ種苗」で売られていたが、最近は大タロギから外されている。 中南米の芋。 インカ帝国を支えた一つの食料だったのか？ 沖縄でも栽培が見られる。 今年は、久しぶりに植えて見ましようか。 オザキフラワーに苗があれば、良いのですが…ネ。 やってみるぞ。 窮乏植物。 根塊が一年中あるようです。 正に窮乏植物。 震災下の大都市東京の食糧不足を補う芋だ。 放任、自然採取、使えそうだ。 生き残るぞ！

そうそう、杉並区中瀬中学校の農場での話し…。 耕地 150坪ぐらいで結構広くて楽しめた。 ミニトマト戦争、別に叱ったりはしませんでした。 ジャガイモは大層採れまして、給食に提供しました。 近くの農家の人にお誉めて戴いた。 嬉しかった。 近くの竹林をお持ちのおば様に「メンマ」の作り方を教えていただく。 彼女も楽しく「トマト合戦」をご覧になっていた。

また、嘱託1年目の同区宮前中学の農場で。 区民農園協会で、開園時には1/3に縮小されてしまいまして、100坪ほど。 がっかりしました。 区民の要請で仕方なかった。 農園運営の必要からミゼットの軽トラを購入、頑張りました。 年度の終わりに、報告書を区に提出しました。 技術家庭科(栽培単元)の実習地です。 ここでも「食用カンナ」も植えていた。 栽培の指導ができる後輩の先生が中々見つからない。 来てが無い。 困った…。

エンドウ、ソラマメ、アズキ、ササゲマメ、インゲンマメ、ライ豆、ラッカセイ、ナタマメ、……。 豆たちは種子が大きくて「ヘソ」も解り易く中々面白い。

風に吹かれて飛び散る種。 水に流されて漂着する種子。

何処にでも見られる西洋タンポポ。善福寺公園の池の北岸には日本タンポポの白花が咲く。黄花日本タンポポは、見つからない。根気よく探せばあるかも。茎の先に落下傘のような「タネ」・・・何処までも飛んでいく。

サクラソウ 東京荒川の「浮間」。オリンピック・ボート場に近くに群落がある。既に姿を消しているが、大川の曲がり角毎にサクラソウの群落があった。

秩父の高地の河原に花が咲き、増水した川原、種が流れる。蛇行した先の岸に漂着する。サクラソウの名所が各所にできる・・・。

江戸の人たちが鉢に植えて楽しんだ。白花を探し、八重花、二重。斑入り。交配し、名を付けて楽しむ。大層高価なものもでたようだ。

中国シュンラン、日本シュンラン、ケイラン、カンランもいずれも高価なお値段が着く。黒崎陽人先生の世界だ！。(東洋蘭の専門家、フランスで没、画家)

先生は、石神井公園近くにお住まいで、良くお世話になりました。蘭たちの増殖法も開発されて、価格が激落した。カンラン、ケイランは、今も高価。手は出せない。勉強させていただきました。

蘭たちはブドウ棚の下を喜ぶ。葡萄に着く酵母菌の働きであろう。か？。ブドウ棚の銅線の「緑青」＝「錆」の殺菌効果のせいでありましょうか・・・？。喜ぶ。

ニンジン、アシタバ・・・の種は軽い。風で飛ばされる。好日発芽。覆土は薄く・・・。伊豆の島々では勝手に広がるヨ。伊豆半島でもやたらに生えている。「土」を被せすぎると芽が出てこない。好日発芽種子。大島でも然り。繁殖する。健康野菜。

島の町営住宅に居ました時に、庭中明日葉。良く食べました。明日葉の隙間からマムシが飛び出す。攻撃して来る。飛びついてくる。シャベルを振り下ろす。同僚の神津島ご出身のお坊様の胃袋に収まる。瓜生様の胃袋に。

当時も痩せていた私に、週一毎に子供たちが持ってくる。親が持たせるのである。アシタバとマムシと海水ですっかり元気になりました。『先生、怒ると怖い』。マムシは届かなくなった。町立大島第二中学校の嬉しい思い出です。

大島2中には、広大な学校農園があり、技術家庭科の栽培学習の実習畑。

新卒の私には大層の苦勞でありました。農学部卒業。戦後(S20)爆弾穴の荒地からの農業体験だけでは間に合いませんもの・・・。人糞も担ぎましたヨ。堆肥づくり、苗床作り、苗作り、ウサギを飼う、鶏を飼う。

職業家庭科、栽培学習の担当者の仕事です。鶏も鯖いて食べました。面白かったけれど大変でした。サヤエンドウの栽培で、全校生で行うキャンプの資金も稼げた時は、嬉しかった。貴重な貴重な体験でした。アシタバには、強い思い入れがある。「大島」には、感謝しかない。

まだ、セメント舗装のされていない町道(循環道)の、椿のトンネル。地表は、ピンクの絨毯。夢のような輝きでした。満開の椿トンネル。みごと。

『典康、その音だけは出さないでおくれ!』。祖父92才。祖父の家すぐ近くの「天神湯」、銭湯でのことである。祖父が震える。濡れ手拭いで背を叩く音。

北前船の代々の網元であった祖父が、函館・札幌、山形の酒田、富山県海老江村。手広く商いをしていた。宮大工の棟梁、城作りにも係わったようだ。

この辺り(海老江村)は、荒海(海蝕地)、中沖(中沖)と言う地名もある。常世田令子「常世伝説の謎」三一書房にある話に共通する。そんな村がが…あった。

村や町が、海蝕されて、入り江になる。台地の丘の上に西光寺(大宝寺?)が残る。本堂の両脇に大きな猫足の石灯籠。遠藤勘七、寄贈とある。何代目かの勘七さんのものでありましょ。祖父の檀家寺であった。

で、中国が混乱期。北前の大船が台風(台風)に流され難破。遼東半島のどこかの浜に流れ着く。(詳しくは聞いていない) 近くの集落の者たちに救助される。

村長の娘に気に入られて、やがて結婚。十数年。

小説、パールバックの「台地」に書かれている激動の時代。蒋介石が逃げ回った時代だ。集落間の争いが果てしなく続く。殺さなければ、殺される。そんな状況であった。

で、祖父も戦った。青龍刀を振り回し、銅切り、首切り。その音が『ビシャ』『ピシャ』『ビシャ』。おじいさんは、細身ながら大層の筋肉マンであったようだ。当時としては大きい方。身長 1M70 強。細身で筋肉質。相当の強者であったであらう。その音の話だ。『ビシャ』。祖父は、震えあがる。誠、思い出したくないのである。震えるのである。

若くして総入れ歯。変相だ。妻に顔の洗い方も注意される。教えて貰う。中国人になった。ここにセピア色の家族写真が残る。15~6 才の年頃の姉と妹。妻。祖父は辮髪。尻に届く長い髪。和やかな家族の写真である。祖父は、必死に生き残った。幸せであったようだ。

現地の妻子を残し帰国。元の 4 人娘の家族と暮らす。帰国後、中国での暮らしを語ることは、ほとんど無かった。全く無かった。

後日、浄土真宗の寺「坂東法恩寺」の総代役を長く務める。事業(東京海上保険KK代理店)の方も成功。彼の持ち合わせた、話し上手、強健な体力、気迫で生活は成り立った。豊かであった。時には、「赤紙」を張られたり(=破産)、時には、お大臣様であったり、波乱万丈な祖父であったようだ。懺悔の気持ちが強かった。仏教に帰依した。『南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏』。

私の知っているお爺(遠藤勘七)さんは、孫好きの好々爺。戦後、余力で 94 歳まで生存した。私は、爺が大好きであった。容貌、体つきが、哲学集団の「天風会」の創始、天風先生にとっても良く似ていた。大谷翔平の尊敬する天風先生によく似ているのである。

爺は、魚を食べるのが大好き。昆布食べるのが大好き、焼き板昆布、焼き海苔大好き。じいちゃんが、胡坐(あぐら)の上で、味を教えてくれた。カツオ、ブリなんぞは、一本買いだヨ。栄養失調の私は、魚好きになり、で、助かった。「おじいさま」のおかげです。ジイジは、軽い朝食後、寝床に伏して休み、力及なかった阿闍梨のような最後を迎えた。大往生。目出度い。ほんに、波乱万丈の生涯を終えた。(明治 4 年生) 昭和 20 年の海老江村大宝寺の法事の連絡あり。 T、